

京都ワンディセミナー：利用者の立場から見た大学図書館

京都大学工学部等図書室における情報リテラシー教育

大 橋 亜紀子

Information Literacy Programs at Libraries
in Faculty of Engineering, Kyoto University

Akiko OOHASHI

はじめに

今回、京都大学の工学部における情報リテラシーということで、工学部等図書室で取り組んできた「工学部等文献収集講座—工学情報を get しよう」の報告をさせていただきます。

はじめに、取り組み主体である工学部等図書室について説明します。京都大学工学部内には、工学部内の調整を図る図書掛を含めると、10の図書室があります。これらの図書室に、関連研究科の情報学研究科及びエネルギー科学研究科の図書室を加えた図書室グループを、工学部等図書室と呼んでいます。日常業務においては、基本的には独立した図書室として個々に運営していますが、月に一度、共通の問題を話し合うために事務連絡会議を開いています。今回ご報告するのは、この工学部等事務連絡会議が主催する情報リテラシー教育で、略して「get」と呼ばれています。

1. これまでの文献収集講座

get は今から4年前、平成11年秋から開催されました。内容は工学情報に重点をおいたものであり、学部4回生以上を対象としています。開催の経緯等は、これまでも論文が発表されているのでそちらを御覧下さい。平成11年度から平成13年度までの3回にわたるgetでは、毎年2日間にわたる講義形式で行われました。図書館職員がいくつかのトピックについて、それぞれ約20分程度の講義を行い、Chemical Abstracts については詳しい先生に1時間ほど講義をしていただいていた。図書館職員の講義の内容は、資料形態別に会議録、特許資料、電子ジャーナル等に分けたトピックと、INSPEC 等の二次情報データベースの説明を主に行ってきました。講義当日は資料をホッチキスで止めた簡易テキストを配布し、後日、講義で使った資料に、いくつかの原稿を追加して冊子を作成し、研究室に配布していました。

2. 利用者・職員からの意見

毎回、get 終了後にアンケートをとっています。その中で、利用者からは以下のような意見がありました。

- ・ゆっくり話してほしい、時間を長くしてほしい
- ・実際にデモが見たい。パソコンを使用した演習形式にしてほしい
- ・資料をオンラインで公開してほしい

平成14年度の get を始める前の事務連絡会議では、工学部等図書職員から次のような意見が出ました。

- ・昨年度、参加者が減少したこと（総人数200→132）
- ・冊子を出版することについて、会計から目次をみる限り毎年内容が同じなので考えよという意見
- ・負担にならないよう、簡単な方法を考えるべきという意見、また参加することに不安があるが、やれる人がいるなら続けた方がよいとの意見
- ・研究者からの質問に get の冊子で解決できることも多いし、職員同士でもこれらの知識を共有したい

以上の意見を考慮した上で、平成14年度の get の計画をたてました。

3. 平成14年度 get 計画

演習は利用者からも希望が出されており、平成14年度は演習形式に取り組むことになりました。規模自体は縮小せざるを得ませんが、これまでの講義形式によって、図書職員の存在をアピールするという当初の目的は充分達せられたと考えられます。また、一方的な講義をそれぞれ短時間で行うのであれば、冊子によく目を通すだけでも代用できますし、イベント的企画から少人数対象に切り替えることで、負担も軽くなるのではないかと考えました。結局、少人数の事前申し込み制で数回にわたって開催することに決定しました。

また、資料は利用者へのサービスだけでなく、図書職員が情報を共有するためにも、過去の文献収集講座の内容を収録した工学部等図書室ホームページをたちあげ、平成14年度分についても、演習のためだけではなく、後から見ても分かるような形の資料にして、公開することとなりました。開催時期については、例年、アンケートでは秋がよいと結果が出ていたため、10月か11月に開催することとなりました。

4. 平成14年度 get 企画・運営

その後、実際に中心となって企画するメンバー、get 世話人と、ホームページ管理者を、立候補形式を募ったところ、昨年度担当者を中心に、工学部2年目の職員3人と工学部1年目の職員2人で担当することになりました。このメンバーで打合わせを行い、企画・立案したものを事務連絡会に随時報告・意見聴集を行うという形式ですすめられるのは例年通りとなりました。

5. 事前アンケート

形式を一新するにあたり、まず事前に利用者にアンケートを取り、どの分野に関心があるのかを調査しました。形式はA5サイズで、データベース名や「論文の探し方」等の項目を挙げ、

関心のある項目にチェックをしていただき、あとは意見があれば自由記入欄に書き込んでいただく形式にし、簡単な回答が可能なように心がけました。回答結果は、論文の探し方、電子ジャーナル、Web of Science、INSPEC 等の項目に集中したため、演習の演目を決める際の参考にしました。

自由意見は具体的記述が多く、京都大学では Web of Science についての意見が多く、同時接続数を増やしてほしい、接続が不安定、使ったことがないので使い方全般とデータベースがカバーしている範囲について知りたいとの意見がありました。

6. 平成14年度 get カリキュラム

上記アンケート、また事務連絡会議で決まったことを元に、get 世話人の打合わせで、具体的内容について次のように決定しました。

- | | |
|----------------|-----------------------------------|
| 1. 初心者向け課題演習形式 | 2. Web of Science 演習（初級編・中級編） |
| 3. INSPEC 演習 | 4. Web of Science 講義 |
| 5. 特許電子図書館講義 | 6. 化学系データベース SciFinder Scholar 講義 |

前半は図書館職員が担当する演習、後半に外部の講師を招いて上級者向け講義をしていただく場を設けました。

演習の会場は、端末台数の多い電気系図書室とし、定員 5 名で各 2 回、INSPEC の演習については演習用 ID の貸出の都合上¹⁾、京都大学学術情報メディアセンターとの共催という形をとったため、場所はメディアセンターの端末室で定員20名の各 2 回、講義についてはそれぞれ 1 回ずつ開催しました。演習は各 1 時間半とし、講義は 1 時間30分から 3 時間としました。10月後半に演習、11月前半に講義というスケジュールで行いました。

7. 平成14年度 get 変更点

これまでのアンケートの意見を取り入れ、講義形式だけではなく演習形式を取り入れたことが一つ。また、これまでは、工学部内の人員のみで行ってきましたが、今回は工学部以外の部局や、京都大学外の機関と協力して、進めることで、省力化とレベルアップを同時に図ったことが挙げられます。

演習については、Web of Science 初級編は、附属図書館に依頼し、get の会場で初級編として通常附属図書館で行われている演習を行っていただきました。INSPEC では、メディアセンターとの共催という形をとり、センターの技官の方に、技術的な説明をしていただきました。

各種講義に関しては、Web of Science は ISI 社、SciFinder については化学情報協会に依頼し、特許電子図書館に関しては京都府知的所有権センター・特許電子図書館情報検索指導アドバイザーの方に依頼して講義を行っていただきました。

8. 平成14年度 get 最終アンケート

次の 7 点についてのアンケートを、受講後に行いました（毎回行ったため、同一回答者も複数とカウントされている）。

- | | |
|--|--------------------------|
| 1. 学年 | 2. この講座を何で知りましたか (複数回答可) |
| 3. このような講座・ガイダンスはいつ頃行われるのが良いと思いますか (複数回答可) | |
| 4. 受講科目 | 5. 受講感想 |
| 6. 文献収集講座についての感想 | 7. 次回への要望 |

・アンケート結果

総参加数は96名という結果でした。ただし、同じ学生が複数の講習を受けることが多かった
ので、実際の人数はこの数字より若干低めになるかと思います。学年については工学部の学部
4回生が最も多い結果となりました。この理由としては、大学院入学試験が終わって、ちょ
うど論文を調べる段階に入る学生が多かったから、ということも考えられます。

getに参加したきっかけについては、チラシが最も多く、次いでメールが挙げられました。
メールに関しては、工学部 (あるいは他学部) の図書室が、任意で研究室へ案内を出したもの
です。その他、ポスターや友人、先生の勧めも多く挙げられました。

広報手段は、チラシを各2種類、時期をずらして各研究室へ配布してもらうように各専攻図
書室に依頼したほか、ポスターを2種類、生協や他学部の掲示板などに掲示したり、ビラ配り
を行ったりもしました。また、演習の始まった10月中旬から講座が終了するまでのあいだ、5
枚のたて看板を設置し、そこにもスケジュールが分かるよう、ポスターを掲示しました。

開催時期についての希望は、秋が最も多く、次いで春が多い結果でした。

感想について、演習に参加した学生からは概ね好評でした。ただし、外部講師による講義に
ついては、難しいという評価が集中したものもあり、外部の職員に任せるにしても、もう少し
職員も内容について留意すべきだったと思わせる点もありました。次に、アンケートに書かれ
たコメントについて、いくつか抜粋してみました。

・演習について (要望)

初心者向け課題演習では、課題は考えても分からないものが多く、皆で同時にさっさと要点
だけ教えて欲しい

Web of Science は、丁寧で分かりやすかったが、INSPEC はレベルが高くてよく分からな
かった。もっと実習の時間を増やすべき

もう30分長くてもよい。また別の講座にも参加したい

他のデータベースに関しても講座を開いてほしい

・講義について (要望)

年3、4回開講して欲しい

広告を見落としてしまいがち。その対策をして欲しい

実際にパソコンを触りながらの方が分かりやすい

・その他感想

初心者向け課題演習は、解説のプリントが詳しいので独学でも十分
少人数で詳しく演習できるので有難い

9. 平成15年度の get

平成14年度 get の反省としては、以下の点が挙げられます。

- ・少人数制のため、数に限界がある
- ・広報不足
- ・自発的な参加者はともかく、大多数の学生にたいする初歩的な文献収集の講義の機会がなかった

3 番目の点に関しては、各図書室でケアできていれば問題はないのですが、結局、図書室によってかなりの差がありました。資料はホームページに置き、誰でもアクセスできる状態にしてありましたが、学生からのアクセスを待っているだけでは弱いように感じます。

そこで平成15年度はまず4月から6月に、各図書室ごとにサービス対象者にたいして、何らかの文献収集ガイダンスを行う方式としました。これは、工学研究科の桂キャンパスへの移転が本格化して職員の負担が増えてきていること、また工学部等図書室のできるだけ多くの構成員が関わるように配慮した結果でもあります。

get 世話人は、外部との調整および講習資料や人の援助を行い、企画・立案は各図書室に任せられ、それぞれが実情に合わせて運営していくようにしました。各図書室が、研究室に直接声をかけるため、研究室と密に連携していくことができるという利点もあります。資料は昨年度の演習資料をほとんど流用できるため、それほど負担にはならないと考えられます。また秋には昨年と同じように、外部講師を招いて講義を行う予定です。

10. 物理工学系図書室の場合

私の所属する物理工学系図書室では、学部4回生を対象に、ガイダンスを行いました。各研究室に案内を出し、申し込みは研究室単位で受け付けました。開催期間は6月初旬から一か月とし、時間は一時間程度で、人数は約5人を目安に考えました。内容的には、簡単に地下書庫等の図書室案内を行った後、昨年度の初級者向け演習の資料を元に、文献データベースの利用、OPACの利用、電子ジャーナルの利用など文献入手までの一通りの流れを説明しました。ただし端末台数の関係もあり、演習形式ではなく講義形式で行いました。

実際に取り組んでみると、研究室によっては院試後に本格的に研究を始めるとのことで、ほとんど論文を読んだことがないという学生もいましたが、そのあたりは相手に合わせて説明を変えていきました。今までの所、総数55の研究室のうち、参加したのは22研究室、参加人数は90人で全体人数の約三分の一強といった具合です。物理工学系だけで90人ですから、やはり広範囲の学生に必要な最低限のことを伝えるには、この各図書室が主体となって動く方法の方が向いているようです。

11. おわりに

今回のガイダンスの後にも、アンケートをその場で書いて提出していただきましたが、「正直、こんなに有用な情報を教えてもらえると思わなかった」という感想を聞くと、嬉しい反面、普段の図書館からの宣伝不足を感じました。

学生からの質問や、自発的に文献収集のためのテキストを手にするのを待つだけでなく、ガイダンスや講義、それに演習などを企画し、図書館側から学生、また教官に積極的にアピールしていく必要性を感じました。

最後に、工学部等図書室のホームページアドレスをご紹介します。

こちらに、今回ご報告した昨年度の演習資料、および今年度の各図書室の講習会開催予定などが掲載されています。よろしければ、一度ご覧ください。

注

- 1 京都大学では、学術情報メディアセンター（旧大型計算機センター）のシステムで INSPE が提供されており、センターと校費契約をしている研究室のみが利用できる体制となっている。

参考

慈道佐代子「利用者向け研修プロジェクト——企画と実施例——」『情報の科学と技術』53(5)、2003、p. 263.

京都大学工学部等図書室ホームページ

<http://www.mtl.kyoto-u.ac.jp/users/library/enghp/index.htm>